万国外科学会（ISS/SIC）日本支部ニュース

News of Japanese Chapter of International Society of Surgery

発行：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部
〒213-8507　神奈川県川崎市高津区溝口 3-8-3
帝京大学医学部附属 溝口病院外科
TEL：044-844-3333（内線3223）FAX：044-844-3222
発行者：山　川　達　郎
編集責任：万国外科学会（ISS/SIC）日本支部広報担当委員・村田宣夫（埼玉医大総合医療センター外科）
E-mail：03nmura@saitama-med.ac.jp
印刷：株式会社 dig　TEL:03-3551-3060
年２回発行1995年4月創刊

支部長挨拶

万国外科学会総会日本招致に向けて

万国外科学会
日本支部長
山川　達郎
（帝京大学医学部名誉教授）

2009年万国外科学会日本誘致の可能性

第100回日本外科学会会期中の2000年4月14日、東京国際フォーラムで開催された第9回万国外科学会日本支部総会には、来日中のPresident,Professor SamueI A.Wells Jr.はじめ、President elect; Sir Peter J. Morris, Secretary General; Professor Rudiger Siewert, ISSF-Secretary Treasurer; Professor Lloyd M. NyhusとAdministrative Director; Mr. Victor Bertschiら万国外科学会のOffiicerのご参加を得て、盛大に開催されました。この企画の最大の目的は、ご出席の会員の皆様に万国外科学会本部活動状況をつぶさにご理解いただくことに加え、ウィーンで開催された万国外科学会総会時、私共はポスター貼付やパンフレットの配布を行って、2009年に本会招致の意志のあることを非公式ながら表明したわけですが、日本の現状をみていただくためのSite-Inspection Tourをしていただくことと日本招致の可能性を探ることにありました。実際、日本外科学会終了後、Mr. Victor Bertschiは、1）Tokyo Forum, 2）Tokyo Big Sight, 3）Chiba Convention Center, 4）Yokohama Convention Center, 5）Kyoto Convention Center, などを精力的に回られ、帰国されました。京都においては、京都大学　井上一知教授、大阪市立大学　佐竹克介先生や京都コンベンション　ビューロー事務局長　岩本清志様、その他の地域では、国際観光振興会の谷　宏子様、同海外誘致部・マーケッティング課　富岡秀樹様らの大変なご協力を賜りました。ここに会員を代表して感謝申し上げます。Mr. Victor Bertschiは、その後、World Congress of Surgery of ISS/SIC－ Report of Site Inspection in Japan－において、1）各chapter会員数が減少傾向にある中で、日本支部は増加傾向にあり、現在279名を数え、第２位の会員数を誇ること。2）最近３回の万国外科学会の日本支部会員抄録提出数は第１位で、その受理率も第１位であり、さらに日本人参加者数が全体の25-35%を占めることに加え、その他、日本の経済事情、安全な治安状況、日本での国際会議開催にあたって必要なCongress Organizerの有無、宿泊施設、観光などについて詳細な報告を本部に提出されておられます。その中で、京都、横浜がSurgicaIWeekを開催するすべての条件を満たしていると報告しています。

さて、ご存知のように、記念すべき2001年のCentennial Congressは、当然のことながら本会の発祥の地であるBrussels/Europeで開催されます。現在、その他のCongress開催地として一応、決定しているのが、2003年のBangkok/Asia、2005年のDurban/South Africaです。2007年の開催に関しては、前回のVienna CongressでAustralian Section, Canadian SectionとUS Sectionが立候補して、Australian Sectionが選ばれたのですが、最も会員数の多いUS Sectionが主催すべきであるという意見が上層部に多く、最終決定は次回のCongressでの役員会に委ねられることになっています。しかし、ここで問題になるのは、2007年の開催国に一度は指名されたAustraliaが再度、2009年の開催国として立候補してくる可能性があることです。これに関しては、本部役員の多くが、そのような前例がないこと、すなわち、一度、辞退した者が優先権を得るということは矛盾すると言う理由から反対していますので、まずは、Australiaが自動的に選ばれる可能性は少ないのではないかと考えられています。したがって、2009年総会は日本に招致できる可能性が高く、日本支部としても更なる努力をしていく所存です。会員の増加なども大切な条件となります。会員諸氏の更なるご協力をお願い申し上げます。

2005年本会招致の可能性について

前回の第9回日本支部総会で得た情報の中で、新たな可能性として、2005年があるということが浮上してきました。すなわち2005年のCongress開催地として一応、決定しているDurban/South Africaが、Surgical Weekを招致するには、その条件、殊に経済状況と治安状況その他の点において問題となっているということでありました。この第9回日本支部会時には、2005年にも立候補すべきであるという意見が会員の中から出ました。結論は得られませんでしたが、雰囲気としては、2005年にもその意志があることを表明すべきであるというのが、大方の意見であると考えられましたし、またその後も、それを指示するご意見を会員の方から賜りました。日本支部役員はそれを真摯に受け止め再検討して、さる7月4日、出月康夫前会長、比企能樹理事らの御了承を得て、日本支部長の名前でPresident,Professor A. Wells Jr.と、Administrative Director, Mr. Victor Bertschiに、たとえ2005年になっても日本支部会は、喜んで万国外科学会総会を主催する意志があることを伝えました。お二人からは、次回の理事会ならびに次回総会で討議するとの好意的なご返事を直ぐにいただいています。

万国外科学会を日本に招致する意義

とはいえ、この状況の中で、何故に国際学会の招致かとお考えになる方もおられるに違いないと思います。ご存知のように、万国外科学会は、数ある国際学会の中では、最も古い歴史を有する権威ある学会であり、外科学の歴史を飾る多くの外科医が名簿に名前を連ねています。お話にしか聞いたことのないような有名な人物に直接にお会いすることができたり、また、お話を伺うことのできるのもこの学会の素晴らしいところです。したがって、この会を日本で開催することは、極めて深い意義があり、日本外科学会のステイタスを高めることにもなると思われます。

一方、前回この学会が日本で行われたのは1977年、Kyotoにおいてであります。その後は、1979年San Francisco，1981年Montreux，1983年Hamburg，1985年Paris，1987年Sydney，1989年Tronto，1991年Stockholm、1993年HongKong，1995年Lisbon，1997年Acapulco，と続き、次がBrussels, Bangkokが予定されています　そろそろ日本が立候補してもよい時期です。

機は熟しつつあるのも事実です。2005年の開催国として、日本が立候補した場合の問題点は、アジア、アジアと続くことでしょうが、そういった事例も以前になくはありませんので、可能性は極めて高いと考えています。

国際観光振興協会発行の国際コンベンション講演会･主催者懇談会講演録の中で、参議院議員･前文部大臣、科学技術庁長官有馬朗人氏は、“国際会議の必要性――日本の大学･研究所を国際化するために――”と題するご講演の中で、国際会議は1）若者にとって絶好の発信の機会であること、2）最新の情報の系統的な獲得の場であること、3）世界の主導者との接触を可能とする場であること、4）世界の同業者との交流、人脈の形成を可能とする場であること、5）特に若者にとっては、勇気づけられ、刺激を受けることができる絶好の機会を提供してくれる場であると述べておられます。また、日本でやる国際学会は日本の人たちが今までやってきたことを発表して、外国人から情報を得るという点で非常に意義があるとも述べておられます。最近自治医科大学の永井秀雄教授にお会いした際、医局員には、日本語は使わないように指示して、カンファランスなども全て英語として1日を過ごしたそうですが、結構、皆、何とか喋るよう努力し、全く問題がなかったとお話して下さったことがあります。私も最近の若い人達の中には、英語がよくできる人が増えていることを実感して感じています。しかし、海外の学会となると、お金がなくて行けない若者が多く、それが大きな問題です。もっともっと日本で国際学会が頻繁に行われたら、若い人も容易に参加できて、勉強にもなるでありましょうし、また、国際的感覚を身につけることができるはずです。これは、強いては日本医学会の国際化に貢献することにも連なることになるのではないでしょうか。そんな所にも日本で万国外科学会総会を日本で開催する意義があると確信しています。

誰がこの会を主催することになるかは私自身には判りませんが、会員の中にはその大任を充分に全うできる先生が数多くおられますので、まずは招致に向け、私どもは、努力したいと考えています。そのためにも会員数の更なる増加が必要です。将来が期待される若い先生方のご推薦を事務局までお願いいたします。先生方のご支援をお願いいたします。

理事挨拶

2000年度（ISS/SIC）理事会に出席して

万国外科学会
理事
比企　能樹
（北里大学名誉教授）

春、未だ肌寒いブリュッセルのHotel Le Méridienは、時の人米国のオルブライト国務長官がEU会議に出席のため宿泊して慌しい。この古典的な街はEUの本部が置かれ、ヨーロッパをにらむ新しい国際都市と生まれ変わった。

翌日3月10日から12日まで ISS/SIC の理事会および ISW2001 のプログラム・コミティーが、このホテルを会場として開かれ、S.Wells 会長他15人の理事を中心とした人々が集った。

初日の総会会場見学に始まり、議題は会長からの前回のISWの報告およびR.Siewert新事務総長の紹介、およびISW2001のW.van Hee会長 、2003年の開催地バンコクからの報告など豊富な議題に朝から夜まできっちりとプログラムが組まれた。

そもそも本学会は Prof. Kochelの呼びかけにより世界の外科医が集まり第一回が開かれて以来、今年は100周年を迎える。その記念の学会が発祥の地ここブリュッセルに戻って行われるわけである。

この理事会の議題の中で、特に日本からの理事としての私に与えられた任務は、同じように100回目と節目の日本外科学会総会事務局の慶應義塾大学外科の協力で、英文の学会紹介やポスターなどを借り受けて4月に開かれる紹介を行った。

この紹介によって、日本の学会運営に大いに興味を示した理事諸氏が、事務局長のV.Bertschi氏を日本に派遣し、どのように記念の式典等学会が行われるのかつぶさに視察するように決定された。同時に氏がその他日本の各地にある国際学会開催可能な会場や運営方法を見学し、詳しいリポートを書いて、来るべき日本開催への第一歩につなげることになったと考えられ、日本支部にとってよかったと自負している。

更に日本誘致に関して、理事のひとりとして次の点を強調した。すなわち

1. 日本は1977年以降23年間、この学会を開催していない。
2. 国際学会を開催できる大きな会場が全国に複数あり、いずれも20会場で同時にプログラムが進行できる機能をもっている。
3. 日本は国際会議場をもつ何処の都市においても、開催できる態勢がいつでも既に整っている。
4. ホテルも最高級からビジネス用の簡易なものまで揃えてある。
5. 空港からのアクセスも、大変便利になった。

等の点を上げて、誘致に前向きの姿勢を示した。

翌日に行われたプログラム委員会では、ISW2001の100周年記念総会の学術プログラムが検討された。日本からの本学会出席者数は、例年アメリカに次いで第2位に達している。来年ブリュッセルで開催の記念学会には、当然のことながら数多くの日本からの参加者が出席するものと期待されている。

EU総局をおくアクテュエルな国際都市でありながら、クラシックな坂道の石畳と荘厳なチャペルの数々、王宮と緑多い庭園のブリュッセル、ワーテルローやブリュージュなど周辺の歴史ある魅力的な小都市も含め、観光客をもてなす人々の優しさで、世界からの参加に参加者に対し、心を込めて迎えてくれるであろう。

またそこで行われる学術のプログラムは、広大にして密な期待を裏切らないものとなると思った。日本からも幾つかのシンポジウムを取り仕切ってもらうべく計画が採用されたはずである。是非ともひとりでも多くの参加による、これに向けた質の高い学術発表を行うべく、会員諸氏の奮起を期待したいと祈念する。

もう一つ付け加えるならこの委員会で、プログラムの圧巻となるGrey Turner Memorial Lecture においての講演を慶應義塾大学の北島政樹教授に指名された。1961年より毎回1名が選出されるこの記念講演は過去において、A.Ochsner, T.E.Starzl, P.J.Morris Ch.Herfarth等の錚々たるメンバーに続いて、日本人として始めてアジア人としてふたり目の、第21人目の栄誉を受けることになる。同じ日本の会員として大変誇らしい。

万国外科学会 2000年新入会医師名簿　2000.9.26

北村　雅至 Takemura Masashi	大阪市立大学第二外科
松尾　兼幸 Matsuo Kaneyuki	国立がんセンター
小西　文雄 Konishi Fumio	自治医科大学大宮医療センター消化器一般外科
福間　英祐 Fukuma Eisuke	亀田総合病院外科
酒井　滋 Sakai Shigeru	帝京大学医学部附属溝口病院外科
日月　祐司 Tachimori Yuji	国立がんセンター食道外科
平野　鉄也 Hirano Tetsuya	平野医院院長
細谷　亮 Hosoya Ryo	京都大学医学部第一外科
福島　俊彦 Fukushima Toshihiko	福島県立医科大学医学部第二講座
舟橋　啓臣 Funahashi Hiroomi	名古屋大学医学部外科学第二講座
前田　茂人 Maeda Shigeto	長崎大学医学部外科学第二講座
名川　弘一 Nagawa Hirokazu	東京大学医学部腫瘍外科
金内　一 Kanauchi Hajime	東京大学医学部附属病院分院外科

薬価基準収載

蛋白分解酵素阻害剤
劇薬 指定医薬品
注射用エフオーワイ®
注射用メシル酸ガベキサート

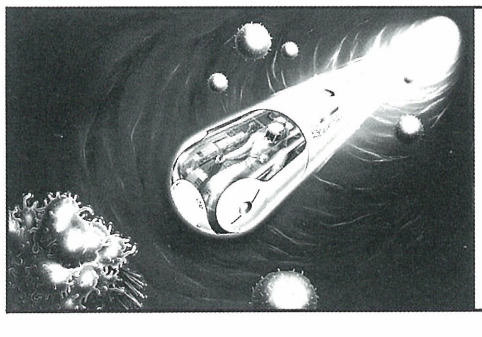
蛋白分解酵素阻害剤
劇薬 指定医薬品
注射用エフオーワイ®500
注射用メシル酸ガベキサート

禁忌（次の患者には投与しないこと）
本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者

〈用法・用量に関連する使用上の注意〉
汎発性血管内血液凝固症 には 本剤は高濃度で血管内壁を障害し、 注射部位及び刺入した 血管に沿って静脈炎や潰瘍・壊死を起こすことがあるので、末梢血管から投与する場合、 本剤100mg あたり 50mL 以上の輸液（0.2%以下）で点滴静注することが望ましい。

●効能・効果、用法・用量、及び使用上の注意等、詳細は 注射用エフオーワイ、注射用エフオーワイ500 各々の添付文書をご覧ください。

製造発売元
資料請求先
小野薬品工業株式会社
〒541-8526 大阪市中央区道修町2丁目1番5号
001013



フルツロン®　薬価基準収載
抗悪性腫瘍剤〈ドキシフルリジン製剤〉
Furtulon® 5'-DFUR
劇 指 要指 フルツロン/カプセル100・カプセル200
※効能・効果、用法・用量、警告・使用上の注意等は、製品添付文書をご覧下さい。
（資料請求先）
Roche 日本ロシュ株式会社
〒105 東京都港区芝2－6－1

万国外科学会
第9回日本支部会 総会議事録

開催日時：2000年4月14日　AM 7:30～8:30
場　　所：東京国際フォーラム　G610号室

1.開会の辞（山川）
2.御挨拶（出月，比企）
3.各officersの紹介並びに御挨拶
4.庶務報告（宮島）

1）会員状況（2000年1月1日現在）
会員数　297名（AM287名，SM10名）
新入会員数　16名
退会者数　4名
増員12名
1999年度会費納入者数　189名（納入率65.9％）
新入会申請中　5名

2）支部活動報告
1999年3月20日万国外科学会（ISS/SIC）日本支部ニュース第8号発刊
1999年3月26日第7回支部総会（博多シーホークリゾート）
1999年8月18日～38th World Congress of Surgery ISS/SIC（Vienna）
1999年11月24日万国外科学会（ISS/SIC）日本支部ニュース第9号発刊
1999年11月25日第8回支部総会（ホテルニューオータニ）

5.広報委員会報告（村田）
年2回発行している日本支部ニュースへの寄稿がよびかけられた。

6.1999年度会計報告（嶋尾）

1999年度収支決算書
（1999年1月1日から1999年12月31日まで）　単位：円

	予算額	決算額	増　減	備　考
I.収入の部				
会費収入	1,000,000	1,240,000	240,000	
広告収入	400,000	200,000	△200,000	
利息	0	597	597	
当期収入合計	1,400,000	1,440,597	40,597	
前年度繰越金	1,224,136	1,224,136	0	
収入合計	2,543,996	2,664,733	120,737	
II.支出の部				
会議費	300,000	237,079	△62,921	2回分
通信費	300,000	145,370	△154,630	
印刷費	500,000	502,425	2,425	ニュースレター；2回分
文具費	50,000	10,395	△39,605	
出張旅費	50,000	47,180	△2,820	事務員出張旅費
人件費	150,000	120,000	△30,000	
雑費	10,000	5,136	△4,864	
予備費	150,000	0	△150,000	
支出合計	1,510,000	1,067,585	△442,415	
当期収支差額	1,033,996	1,597,148	563,152	
次期繰越金	1,033,996	1,597,148	563,152	

7.1999年度会計監査報告（嶋尾）

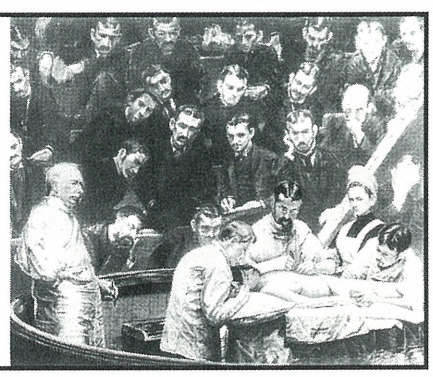
8.2000年度予算案（宮島）

2000年度予算案　単位：円

	予算額	備　考
I.収入の部		
会費収入	1,300,000	
広告収入	200,000	
前年度繰越金	1,597,148	
収入合計	3,097,148	
II.支出の部		
会議費	200,000	日本支部総会開催
通信費	300,000	
印刷費	500,000	ニュースレター
文具費	50,000	
出張旅費	50,000	事務員出張旅費
人件費	150,000	
他誌広告費	100,000	万国外科学会開催案内
雑費	10,000	
予備費	150,000	
支出合計	1,510,000	
当期収支差額	1,588,148	
次期繰越金	1,588,148	

9.その他　CICDについて（青木）

多価・酵素阻害剤　指定医薬品、要指示医薬品㊟
ミラクリッド注射液
MIRACLID Inj.　25,000/50,000/100,000単位
一般名：ウリナスタチン
健保適用
※「効能・効果」「用法・用量」「使用上の注意」等については添付文書をご参照下さい。
<資料請求先>
持田製薬株式会社
東京都新宿区四谷1丁目7番地
電話(03)3358-7211(代) 〒160-8515



第9回 万国外科学会 日本支部総会

出席者名簿　2000.4.14

1. 青木　照明
2. 秋丸　琥甫
3. 浅原　利正
4. 石川　正昭
5. 出月　康夫
6. 井上　一知
7. 遠藤　光夫
8. 大谷　吉秀
9. 沖永　功太
10. 小西　敏郎
11. 酒井　滋
12. 佐竹　克介
13. 嶋尾　仁
14. 嶋田　紘
15. 清水　一雄
16. 角　昭一郎
17. 関川　敬義
18. 高橋　俊雄
19. 高見　博
20. 田尻　孝
21. 田中　雅夫
22. 土田　嘉昭
23. 野口　志郎
24. 馬場　正三
25. 林　四郎
26. 比企　能樹
27. 前田耕太郎
28. 幕内　博康
29. 松本　純夫
30. 丸田　守人
31. 宮島　伸宜
32. 村田　宣夫
33. 山中　若樹

Guests;

President of ISS/SIC,
Professor Samuel Alonzo Wells Jr.（USA）

President-elect of ISS/SIC,
Sir Peter John Morris（UK）

Secretary-General, of ISS/SIC,
Professor Jorg Rudiger Siewert（Germany）

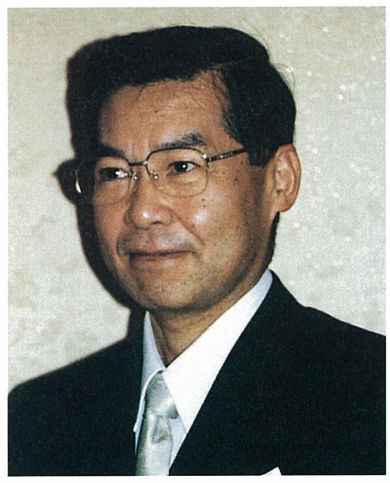
President of ISS/SIC,
Professor Lloyd M. Nyhus（USA）

Administive Director of ISS/SIC,
Mr.Victor Bertschi（Switzerland）

特別寄稿

SICに関する考察

京都大学　腫瘍外科学
今村　正之



国際学会はいくつかあり、それぞれに日本人の活躍が目立ち、日本人なしで国際学会を論ずることが出来ない状態であります。なかでも、万国外科学会(SIC)が出月康夫先生の活躍で香港大会で悪化した経済状態が立て直り、健全成長路線を歩みだしているとお聞きしていまして、日本人として誠に誇らしく思っております。

この度、比企能樹先生が理事になられ、先生の行動力で日本の国際的地位が向上することを期待しております。また、国際内分泌学会関係では野口志郎先生がバンコック大会の会長に選出されたことも、日本人の活躍が認められたこととして誇らしく思っております。

日本人は、古くから海外への関心の高い国民性であることは常々指摘されていますが、私自身も戦前に父が韓国で教職で活躍したときに生まれたためか、海外への憧れは強く、恩師である本庄一夫教授が海外への留学をあまり好まれなかった時代、2年間、HarvardとUCLAに米国留学しました。帰国後に職につくあてもなくただ一度は外国を見てみたいというだけの気持ちで無鉄砲に長女一人と妻を連れて出かけたわけです。この経験が、英語力を僅かに上昇させて、帰国近くには、自動車保険会社と30分間電話で交渉し、ついに勝ちをおさめる成果をもたらし、後年、国際学会でbroken English でも質問する度胸ができたことになりました。若い者には旅をさせろです。幸い、帰国後は京都桂病院の外科の皆様方が、私を引き受けて下さり、今日に至ったわけです。

余談はひかえてSICに戻りますと、私は1987年の Sydney大会から参加して、Toronto, Stockholm, Hong Kong, Lisbonと出席しております。この学会は欧米人が比較的高く評価して、いい人が集まっていると思います。私は、消化器外科の食道、膵と、内分泌外科で発表や時に司会をしていますが、国際的にも親密な友人関係ができる学会です。岩手医科大学の斉藤和好教授とは毎回のように思わぬところで出会いまして不思議なご縁です。

Sydneyでは、たまたまスライド準備室でお会いした藤本吉秀東京女子医大教授と膵内分泌腫瘍のお話をしたことがきっかけで、先生のご推薦もありToronto大会で私の膵内分泌腫瘍の局在診断法(Imamura法)に対する認識が深まり、賞を頂けて賞金で妻に洋服を贈ったことは懐かしい思い出です。Stockholm では、夕映えの市内を散歩中、出月先生と偶然にお会いして夕食をしながらSIC会長を務められる事をお聞きしたことでした。 Uppsalaも訪ねました。植物学者Carl von Linneが住んだ北欧最古の大学町の印象が思い出されます。

Hong Kong ではすばらしいホテルで泊まり、そのコンピュータ化の早さにおどろきました。ここで初めて内分泌外科の司会を経験しました。中華街で日本人商社マンと外人外科病理学者などと遊んだことが、よき時代の香港の最後の思い出です。この学会は、すばらしいホテルを使ったためか、大赤字の由。Lisbon では偶然、タクシーに同乗したオランダ人が癌センターの笹子先生と共同研究をしていた人で、日本の常識を話す機会があったりして、国際学会での偶然の出会いが、論文だけでは伝えられない仕事の信頼を深める機縁を作るものとして機能していることを経験しました。

この考察も最終段階ですが、お正月のいろはカルタにある、犬も歩けば棒に当たる、が私の結論です。尊敬されるべき外科医を犬に例えてまことに申し訳ないのですが、永続するPhrase は真実を端的に述べていることに、今更ながら驚きます。今後もSICの大会に良質の外科医や外科学者が大勢集まって、会場や観光地での出会いの機会が増えて、その頻度に比例して日本人の良い仕事への正しい評価が生まれることを期待しています。そして、SICがますます発展して、日本人が外国人の考え方を知り、国際的に臨床を知る場となり、日本の外科医がSICで学び、交流して、日本の外科学会が発展することにつながることを期待して、筆をおかせていただきます。

39th World Congress of Surgery

CENTENNIAL CONGRESS

of the

INTERNATIONAL SOCIETY OF SURGERY (ISS)
SOCIÉTÉ INTERNATIONALE DE CHIRURGIE (SIC)

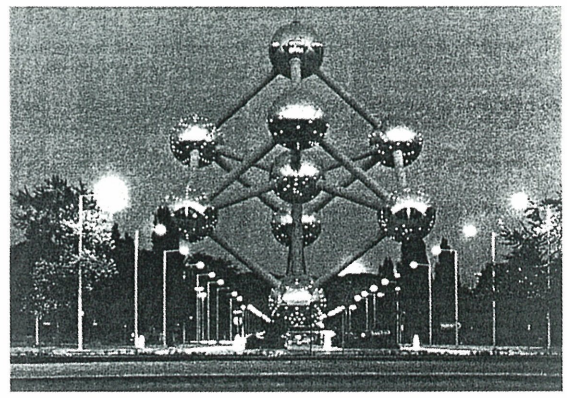
co-hosted by

the ROYAL BELGIAN SOCIETY OF SURGERY

organized as

INTERNATIONAL SURGICAL WEEK - ISW 2001

August 26-30, 2001 in Brussels, Belgium
Palais de Congrès, Brussels, Coudenberg



for Registration, Accommodation, Tours and Exhibition, etc.

Congress Secretariat ISW 2001
MEDICONGRESS
Waalpoel 28-34
BE - 9960 Assenede
Belgium

Phone: + 32 9 344 39 59
Fax: + 32 9 344 40 10
e-mail: ISW2001@medicongress.com

for submission of Abstracts

Scientific Secretariat ISW 2001
c/o ISS/SIC
Netzibodenstrasse 34
P.O. Box 1527
CH - 4133 Pratteln
Switzerland

Phone: + 41 61 815 96 67
Fax: + 41 61 811 47 75
e-mail: surgery@nbs.ch

www.surgery.nbs.ch

Deadline for the submission of abstracts: December 15, 2000

編集後記

◆オーストラリア・シドニーでのオリンピックが終了し、４年後はオリンピックの発祥地ギリシャ・アテネで開かれるという。わが万国外科学会も来年は創立100年を記念してその発祥の地ベルギー・ブラッセルで開催される。これまでと同様に8月下旬の予定であるが、ヨーロッパのこの時期はまだ夏時間である。夜の更けるのが随分遅い時期である。8時、9時になってもまだ空は青く街は明るい。夜が明るいのを何だか不思議に思う。それと共に日本人の私はいつもこのリズムに合わせるのに難渋する。朝の夜明けが遅いのが困るのである。◆どこに行っても早起きの私はヨーロッパでも5時頃には目が覚める。しかしホテルの窓の外はまだ暗い。散歩かジョギングでもしようと思っても、人通りがほとんどなく真っ暗な道を行こうとは思わない。お腹はすいているがレストランはまだ開いていない。とりあえず部屋の灯りをつけて今日の仕事は何だろうかと考える。そこではたと思いつく。前日受け取った学会の分厚いプロシーディングをまだ開けていないことに気づくのである。それを読んでみることになる。自分の発表時間を確認して、ページをめくると面白い発表をこのときに見つけたりする。夏時間の効用に違いない。◆しかし学会の後半になると朝のこの勉強も時間が余ってしまう。その時には仕方なくテレビをつけてCNNを見る。ヒアリングの稽古と思っているのであまり面白くない。出張の多い商社の友人にこの話をしたところ「そりゃ時差ボケだよ」で片づけられてしまった。ヨーロッパに2週間ほど滞在する余裕があればいいのだが。そうすれば時差ボケかどうかはっきりする。◆Surgical　Week 2001は本年12月が締め切りです。これに間に合うように発表の準備を皆さん始めておられることでしょう。来年2001年8月ブラッセルでお会いできる日を楽しみにしています。（村田宣夫）